
僕は紙くず

ランデブー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

僕は紙くず

【コード】

N0781B

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

自分は何も悪くないと思っている少年の、暗い物語。

(前書き)

この作品はテーマ小説です。今回は「紙」をテーマに書いています。「紙小説」と検索すれば素晴らしい作品に出会えます(^o^)/
それでは、月小説に続き暗い話ですがお楽しみ下さい！

僕は紙くず

部屋の隅っこにある青色のゴミ箱。そこに向けて、紙くずを投げる。

ポト……

しかし、ゴミ箱には入らない。いつも壁に当たってしまっ
もう一度投げてみよう。

ポト……

また壁に当たった。ゴミ箱までそんなに遠くないのに、何で入
ないんだろう？

僕は溜息を一つ吐いて、ベッドから体を起こし散らかった紙く
ずを拾う。

そして、くしゃくしゃになった紙くずを右手で撮み、左手でライ
ターを点火させる。

「アハハ……燃えちゃえ。不要になった紙なんて燃えて灰になっ
ちやえ」

外からサイレンの音が聞こえてきた。とてもウルサイ耳障りな音
だ。こんな時間に迷惑だなと思ったが、非常識な奴が何かしでか
したんだろう。まっ、非常識だから仕方ないか。

僕は紙くず

「熱いな。サイレンに気をとられていて、火が指先に触れたじゃな
いか」

チツと舌打ちを鳴らし、マガジンラックに立てられている雑誌をギョツと掴み、勢い良くフローリングの床に叩きつける。

僕を誰だと思っっているんだ。火傷するじゃないか！ と繰り返し叫びながら。

「ハア、ハア……僕に逆らうと痛い目を見る。覚えておけよ？ じゃないと、怒りの矛先はお前に向けられるんだからさ」

荒い息を吐く。僕はあまり体を動かさないから、ちよつとの事で、すぐ息が荒くなる。てかさ、体を動かしたら疲れるし汗出るし嫌なんだよね。

「さてと。そろそろ掲示板に書き込もうかな。馬鹿な奴等しかいない世の中だから、俺が色々教えてやらないと日本はダメな国になっちゃうしね」

僕は自分が思っている事を書いてるだけだ。なのに、コイツらは何も分かってくれない。折角僕が無知なお前らに色々言っただけなのに、何だよこの扱いは。

「荒らしは帰れ。お前はどうせ一人ぼっちの寂しがり屋。キモス。何威張ってんだよ、ハッキリ言っただけ。何考えてるか分からないのはそつちでしょ。早く死んでくれたら平和になるのに」

わざわざテメーラの為に貴重な時間を使って僕が有り難い言葉を書いているのに、何で俺は悪者になるんだよ。ふざけるな。

「畜生……」

外から騒がしい声が聞こえてきた。ドンドンとドアを強く叩く音が聞こえる。何か叫んでいるが、僕には関係ない事だから無視。マジでさ、これ以上邪魔だけはしないでね。

「お前らこそ死ねや。何がウザイだ、何が荒らしだ。ああああ、イライラするな！ ムカムカするな！」

僕は興奮すると、自分をコントロールできなくなる。誰かを傷つけたり物を壊したりした後、自分でやった行ないに気付く。

だから、今の僕を止める事は不可能なんだ。

「死ね！ 僕に逆らった奴は全員死んでしまえ！ アハハハハ、死んじゃえ！ 死んでしまえ！」

気付いたときには、右手にバットを持っていた。そして、思い切り振り回して色んな物を壊している。

止めようと思っても止められない。こうする事でしか怒りを静める事は出来ない。

「アハハハハ、パソコン壊れちゃったよ。そ、そんな所にあるから壊れちゃうんだよ」

大きな音が下から聞こえ、ドタバタと何人もの足音が響いてきた。音は次第に大きくなってきて、そこでようやく僕は落ち着いた。

「ハアハアハア……。僕を疲れさせないでよ」

床に飛び散った教科書、壊れてしまったパソコンやTVや冷蔵庫、ゴミ箱の側の紙くず。僕はその光景を見回してその場に座り込んだ。そして、涙を流した。

「僕は何も悪くないんだ。僕は何も悪くない。僕は良い子なんだ。悪い子なんかじゃないんだ」

そう呟いていたら、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

『高志！ 鍵を開けてくれない。そんな所にいつまでもいては駄目なの。だから、部屋からでようね』

ドンドンドン！

「お母さん……何で、そんな事言うんだよ？」

手足が震えて背筋に寒気が走った。

『聞こえてるでしょ？ 返事ぐらいしてよ、お願いだから。これ以上お母さんを、家族を苦しめないで！』

ドンドンドン！

「皆僕を悪者にする。唯一信じていたお母さんまで、僕を悪者扱いする……」

心臓の鼓動は益々早くなる。

『もう貴方が何を言っても息子さんは出てこないでしょう。もう、無理矢理連れていくしかありませんね』 『何でこんな事になったのよ……私が、何かしたの？ あの子がオカシクなったのは、全部私のせいだって言うの？』

何だよ。コレは何なんだよ。連れていく……何処にだよ？ 無理矢理……結局はそうなるのかよ。

『奥さん落ち着いて下さい。貴方がここで諦めたら、息子さんはどうするんですか？ 唯一信じているのはお母さんですよ』
『そうよね。もうあの子には私しかない……。ここで諦めたら、二人に申し訳ないわよね』

ドンドンドン！

「お母さん。信じて良いんだね。こんな僕だけに見捨てないでくれるのは、お母さんだけだよ」

この時の僕は、笑っていた。僕にはお母さんが、勇者に見えた。暗闇の中に閉じ込められている僕を、助けにきてくれた勇者……。

カチャッー。

「じめんなさい」

お母さんを信じて、鍵を開けた。ゆっくり開けられるドアの向こうに、お母さんの姿があった。そして、

「尚志。さあ、そこから出て来なさい。辛いかもしれないけど、お母さんも一緒に頑張るからさ」

そこには笑顔があった。

「うん。わかったよ」

涙を手で拭い部屋を出た。――八八、警察の人の言葉をスツカリ忘れてたよ。

暗い。視界が暗い。

僕は部屋を出た後どうなったんだ？

『それにしても残酷な事件だった。高校生の長男が、父親と妹を殺して母親を自殺に追い込んで、最後には自ら……』

何だよこの声は。何処から声がするんだ？

『そりゃそうなるでしょ。長男は閉鎖的で、自己中で、精神的にもおかしくて、自分だけの世界に閉じこもって、それから――』

やめてくれ。それ以上何も言っな！

『マジで？ さぞかし家族は大変だったでしょうね』

ウルサイ。黙れ黙れ黙れ。僕を怒らせると、痛い目を見るぞ！

――

僕は紙くず

部屋を出た瞬間、警察の人が僕を囲んだ。そして、殴られ、蹴られ、ボコボコにされた。

「もうやめて下さい。お願いですから……」

お母さんは泣き崩れながら、何度も呟いている。

「アレは犯罪者なんですよ。罪を犯した者は、あれぐらいやられるのが当然でしょう。……足りないぐらいですけどね」

頭が痛い。だんだん視界が暗くなってきた。

――

突然視界が明るくなった。目の前には大量の紙くずが部屋に散らばっていた。そして僕は、手枷と足枷がはめられていて身動きがとれない状況だった。

「一人でそつちの世界にいるのは淋しいでしょう。だから、尚志もこつちにきなさい」

お母さんは、不気味に笑いながら僕の頭を撫でて、部屋を出た。

「少し熱いかもしれないが、我慢しろよ。俺達はあつちで待ってるから」

僕に何かの液体をかけた。そして、無表情で部屋を出た。

僕は紙くず

「じゃあ、私もそろそろあつちに行くね。ここにいたら、燃えちゃうからさ」

紙くずをライターで燃やし、満面の笑みで手を振り、妹は部屋を出た。

「ちょっと待ってよ！ 火を消してよ！ こんなに紙くずがあつたら、火事になつちゃうよ。誰でもいいから僕を助けてよ！ どんどん燃え広がってるから早く助けて！ 熱いのは嫌いなんだ、汗をかきしー」

メラメラと燃える炎は、ちっぴけな僕を熱く包んだ。そして、不要になった紙のように灰になったー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0781b/>

僕は紙くず

2008年11月7日06時46分発行